

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

《自分よりも他人を知ったほうがいい》

このところずっと考えてきたのが「自分」に関する問題です。私個人のことではありません。一般的な「自分」、つまり「自己」「自我」「自意識」等に言い換えてもいいことなのですが、以下、とりあえずは「自分」と書くことにします。戦後、日本人は「自分」を重要視する傾向が強くなりました。これは欧米からの影響によるところが大きいでしょう。その結果、個々人の「個性」「独創性」が大切だとさんざん言われるようになったのです。教育現場ではもちろんのこと、職場などでも「個性の発揮」を求めるフウチョウアが強くあります。

そんなものがどれだけ大切なのかは疑わしい。これまでもそのことを繰り返し書いて、話してきました。よくたとえに用いるのが、大学時代に見た精神病の患者さんのことです。その人は壁一面に大便をぬりたくる癖がありました。个性的という意味では、これほど个性的な人は滅多にいないと思ったけれども、もちろんアコガレあの対象にはなりません。

そんなのは個性ではない、もっと立派な個性があるのだ、という人もいるでしょう。でも、人と違うところを個性と呼ぶのであれば、やはりあの患者さんがかなり个性的なのは間違いありません。

もちろん、特徴や長所があるのはいいことです。誰もがロボットのようになるべきだと言いたいわけでもありません。しかし、そのような個性は、別に「発揮せよ」と言われなくても自然と身につけているものなのです。周囲がお膳立てをして発揮させたり、伸ばしたりするたぐいのものではありません。むしろ周囲が押さえつけにかかっても、それでもその人に残っているものこそが個性なのです。

個性は放っておいても誰にでもあります。だから、この世の中で生きていくうえで大切なのは、「人といかに違うか」ではなくて、Iを探すことです。

《理想像を持ったことがない》

私自身は、「自分とはなにか」といった悩みを抱えたことがありません。年寄りになった今に限らず、思春期ですら、そんなことで悩んだことがない。

我が強くなかった、という言い方もできるでしょう。いつも周囲を見て、周りが一番納まる場所に身を置くようにしていました。「もっとA的になりなさい」と若い頃はよく言われたものです。しかし、いくら自分にしたいことがあっても、ものごとは周囲との関係によって決まる。そういうものだと思っていました。

だから異性関係で悩んだこともありません。どんなに一人であれこれ悩んだところで、相手が反応しなければどうしようもない。その先を考えても仕方がない。そう考えていたからです。おかげで今も恋愛については語れない。

「理想の自分像」なるものを持ったこともない。だから、そういう理想像に向かって努力したこともありません。理想像を目指してがんばる人を否定するつもりは、まったくありません。たとえば野球選手が、数値的な目標を定めて努力するというのは当然でしょう。彼らには、B的にやるべきことが見えているからです。

しかし、私はいえ、若い頃、何をすればいいのかまったく見えていませんでした。幼い頃に、「大きくなったら何になる?」と聞かれた際には、せいぜい、

「兵隊さんはイヤ」

と言っていた程度です。やりたくないことはわかっている、何になりたい、というものはなかった。継ぐべき家業があれば、それをやればよかったです。そんなものもない。医学部に入ったのも、そこを出れば仕事があると思ったからです。

2 《地図の中の矢印》

3 そもそも「自分」とは一体何なのだろう。この問題はずっと気になっていました。

なんとなく答えが見えてきたように感じたのは、「動物は『自分』を持っているのだろうか」ということを考えはじめてからでした。私たちは「自分」があって当たり前だと思っています。むしろ「『自分』なんていない」と考えている人

はほとんどいない。

でも、ほかの動物もそうなのか。そのことを少し考えてみましょう。

多くの動物は、帰る巢、根城ねじろをもっています。一番わかりやすいのは、ミツバチでしょう。みんなきちんとイキソク正しく巢に帰ってくる。別にミツバチに限らず、多くの動物が迷わず巢に帰れます。

なぜ、そんなことができるか。それは頭の中に地図を持っているからです。自分が今どこにいて、巢はここから南のほうにある、といった情報が頭の中にあります。

もちろん、それは別に動物に限った話ではありません。人間も基本的には頭の中に地図を持っています。自宅がどこで、駅がどこで、会社がどこで、というのがわかっている。だから普段、きちんと会社に行って家に帰れるわけです。

方向音痴でいつも困っているという人もいるでしょうが、そういう人も、自分の足りない方向感覚を何らかの形4でおぎなうって暮らしています。

ところが、この地図でどうにも困ってしまうことがあります。

私は若い頃からよく山に出かけています。多くの場合は虫とりのためです。

田舎の山には案内板が設置してあります。これも地図の一種です。困るのは、往々にしてその地図には「現在位置」が示されていないということでした。

つまり、その山がどんなふうになっていて、どういうふういに道があつて、という情報は描かれています。カンジンのその地図がどこウに立てられているのか、という情報がありません。当然、自分がどこいにいるのかがわからない。これではまったく役に立ちません。

いくらシヨウウサイウにその山の情報が書かれていても、現在位置の矢印がなければ役立たずの地図なのです。

《溶けていく自分》

なぜ地図の話をしているか。生物学的な「自分」とは、この「現在位置の矢印」ではないか、と私は考えているからで

す。ほかの人がこういう言い方をしているのを読んだり聞いたりしたことはありませんが、そう考えるとわかりやすいのです。

「自分」「自己」「自我」「自意識」等々、言葉でいうと、ずいぶん大層な感じになりますが、それは結局のところ、「自分はどこにいるのかを示す矢印」くらいのものに過ぎないのではないか。

そのことは実は脳の研究からもわかっているのです。

脳の中には、「自己の領域」を決めている部位があります。「空間定位の領野」^{※りょうや}と呼ばれています。

なぜそんなことがわかるか。部位が壊れた患者さんの症例等を調べた結果、わかってきたのです。

有名なのは、アメリカで脳神経解剖を研究している女性の学者ジル・ボルト・テイラーさんの例でしょう。彼女は三七歳のときに、脳卒中を起こして左脳の機能をハソン^うしてしまいました。ふつうの人は、脳内で出血したら、何が何だかわからなくなつて倒れるだけでしょう。

しかし、彼女は専門家なので、出血した際に「ああ、これは脳の出血かなにかを起こしたな」ということが、すぐにかつたそうです。そして、これから自分の身に何が起こるのかを憶えておこう、と意識したのです。

脳がふつうに働かなくなりながらも、次のように考えていたそうです。

「いいわよ、もうそっちゅうがおきるのを止められないならそれでいいけど、一週間だけね！ ついでに、どんなふうに脳がげんじつの知覚をつくり出すのか、知りたいことを学ばいいんだから」（『奇跡の脳——脳科学者の脳が壊れたとき』〔竹内薫訳 新潮文庫〕より。以下同）

そして鏡の中に見える自分に対して、「これから体験することを全部おぼえておくように」と語りかけました。これはテイラーさんの職業意識の賜物^{たまもの}でしょう。そして実際に回復してから、自分の経験を『奇跡の脳』という本にまとめたのです。

そこには空間定位の領野が壊れたらどうなるかが、見事に描かれています。

まずなにが起こったか。彼女は自分が液体になったようだったと書いています。

「からだは浴室の壁に支えられていましたが、どこで自分が始まって終わっているのか、というからだの境界すらはつきりわからない。なんとも奇妙な感覚。からだは、固体ではなくて液体であるかのような感じ。まわりの空間や空気の流れに溶け込んでしまい、もう、からだは他のものの区別がつかない」

私たちは、自分のことを形ある固体だと思っていますが、空間定位の領野が壊れると、それが液体になってしまう。液体は決まった形をもっていません。ずるずると広がって流れていく。ズーッと広がっていくと、どうなるか。テイラーさんは自分が世界と一緒にになってしまうような感じになったのだと言います。

これは^えリックツで考えるとよくわかる話です。先ほどの地図の話の思い返してみてください。地図の中にある現在位置を示す矢印⁶。その矢印を消していくとどうなるか。「中略」⁷

⁸《臨死体験はなぜ気持ちいいのか》

別のたとえでお話ししてみましよう。この状態が、とてもわかりやすい形で表れるのが臨死体験です。

体験した方は少ないでしょうが、話に聞いたことはあるでしょう。花畑が見えたとか、三途の川があったとか、いろんなパターンがありますが、共通しているのは、とても気持ち良かったという感想です。一種の至福の状態だといえます。なぜそうなるかといえば、自分という矢印が消えて、世界と一体化しているからにほかなりません。

自分が世界と一体化するということは、周りに敵や異物が一切ないということです。どんなに自分のことが嫌いで、自殺を考えているような人であっても、C 的には自分を「えこひいき」して、世界よりも自分のほうを大事に考えています。そして、世界には自分を脅かすようなものがたくさんあります。

ところが、自分と世界の区別がつかなくなると、「ぜんぶ自分」となると、敵も異物もない状態です。だから至福の状態になるのです。ちなみに先ほどのテイラーさんも、脳卒中になった時の感覚を次のように記しています。

「肉体の境界の知覚はもう、皮膚が空気に触れるところで終わらなくなっていました。魔法の壺から解放された、ア

ラビアの精霊になったような感じ。大きな鯨が静かな幸福感で一杯の海を泳いでいくかのように、魂のエネルギーが流れているように思えたのです。肉体の境界がなくなってしまうことで、肉体的な存在として経験できる最高の喜びよりなお快く、素晴らしい至福の時がおとされました」

Ⅱ

自分を「えこひいき」している、と言われてもピンと来ない場合は、子どもがよく発する、こんな素朴な疑問について考えてみてください。

「口の中にあるツバは汚くないのに、どうして外に出すと汚いの？」

なかなか鋭い疑問です。たしかに、口の中にツバがあることは気になりません。でも、ツバをコップに溜めていって、一杯分飲めと言われたら、いかに自分のものでもふつうの人は嫌がります。私も嫌です。

どうしてさっきまで平気だったものが嫌になるのか。これにどう答えればいいのでしょうか。なかなか、うまい答えが思いつかないのではないのでしょうか。

この答えは、人間は自分を「えこひいき」しているからだ、と考えればわかってきます。

人間の脳、つまり意識は、「ここからここまでが自分だ」という自己の範囲を決めています。その範囲内のもものは「えこひいき」する。ところが、それがいったん外に出ると、それまでの「えこひいき」分はなくなり、マイナスに転じてしまふ。だから「ツバは汚い」と感じるようになるのです。もうお前は「自分」ではない、だから「えこひいき」はできない、ということですよ。

大便や小便についても同じことがいえます。いかに自分の体から出たものとはいえ、便を汚いと思うのがふつうです。しかし、体内にあるうちはその汚さを気にしないのもまた事実です。「あんな汚いものが体内にいつもあるなんて耐えられない」という人は、ちょっと問題があります。

水洗トイレがおフキユウしたことも、この「えこひいき」とかかわっていると私は考えています。私の子どもの頃はもち

ろんですが、戦後もずいぶん長い間、くみ取り式のトイレがありました。それがものすごい勢いで水洗トイレに替わっていききました。今では一般の家庭には、ほとんど見られないでしょう。

くみ取り式はなぜ消えたのか。経済の成長も要因の一つでしょう。

でも、私は、多くの人が「自分」「個性」と言い出したのと、水洗トイレの増加は並行していると思っています。

「自分」というものをカッ^エコとしたもの、世界と切り離されたものとして、立てれば立てるほど、そこから出ていったものに対しては、マイナスの感情を抱くようになる。「えこひいき」すればするほど、出ていったものは強いマイナスの価値を持つようになるのです。

さっきまで便はお腹の中にあった「自分」の一部だった。その時には別に汚いなんて思いません。でも、出て行った途端に、とんでもなく汚いものに感じられる。早く目の届かないところにやってしまいたい。だからサーツと流してしまえる水洗トイレがいいのです。

《生首はなぜ怖い》

私の本業だった解剖でも同じことがいえます。長い間、私には不思議で仕方がないことがありました。なぜ人は解剖を嫌がるのか。これがよくわかりませんでした。

生首や切り落とされた腕といったものに、多くの人は強い恐怖心や嫌悪感を抱きます。当たり前だ、気持ち悪いんだから、という人もいるでしょう。気持ち悪いと思わないほうがおかしい、と。

Ⅲ、本当に「当たり前」なんでしょうか。そのへんにいる人の顔や腕には誰も嫌悪感を抱きません。もしも抱くことがあるとすれば、それは顔や腕の問題ではなく、おそらくはその持ち主への嫌悪感です。少なくとも「顔全般」「腕全般」が嫌いという人は滅多にいません。

これも先ほどのツバと同じことが言えるはずですが、つまり、体の一部としてくっついていてるうちは「えこひいき」できるが、切れたとたんにマイナスの価値を持つようになってしまう。

他人の体の一部だから気持ち悪い、ということではないはずで、IV 自分の小指を切り落として、保存できるように加工したとします。V、それをネックレスにして身に付けていられるか。おそらくそんなことが平気な人はいません。精神科の患者さんでも、そういう人はいないでしょう。自分を傷つけることを繰り返す人はいませんが、小指のネックレスが平気な人はいない。

VI、自分の体から離れたとたんに「えこひいき」をしなくなるからです。

本や論文についても、同じような感覚があります。

自分が書いた論文のことを「排泄物^{はいせつぶつ}」と表現する人がいます。それも自分の脳の中にあるうちは、自分自身として「えこひいき」していたのですが、外に出したとたんに、見たくないものになったのでしよう。私も自分の書いた本を読み返したいとはあまり思いません。

《誰もが幽体離脱可能》

興味深いのは、先ほども触れた臨死体験です。その時点で、周りから見ている限り、その人に意識はありません。当然、返事もしません。

ただし、かすかな意識があつて、ある種の夢を見ているような状態です。

その夢には、いくつかの共通パターンがあるようです。「川の向こうから死んだおばあさんが手を振っていた」というようなものはお聞きになったことがあるでしょう。

それ以外でも、VIIの東西を問わずによく報告されているのが、ベッドに寝ている自分を、上から見下ろしていた、というような内容のもので、幽体離脱と表現されることもありま。

なぜこのような現象が起きるのでしょうか。実際に見下ろしているわけではないのだから、脳のいたずらのようなものの産物なのは間違いない。

おそらくは、意識レベルがどんどん低下していった時に、「見ている私」と「見られている体」という二つが最後に残

る。「寝ている私を自分が上から見ている」というと二つの存在があるようですが、これはもちろん本来は一つのもので
す。

ギリギリまで意識がなくなった最後の状態でも、「上から見ている自分」というものを私たちは持っていることになる。
そんな状態でも持っているということは、かなり本能に近いところで、その鳥瞰する自分を持っていることになる。無
意識に近いところで、そういう客観性を私たちは持っているのではないかと考えられます。

なにかを **D** 的に一所懸命やっている時には、そんな客観性があることは忘れてしまっています。意識から外れてい
るのです。でも無意識にはずっとその客観性を持ち続けています。

家内は若い頃からお茶（茶の湯）が好きで、お手前をすることがありました。ある時、している間は **VIII** で、⁹ なにか
をやっているという意識がまったくくないことに気づいた、と言っていました。慣れきった作業をしている時には意識がな
いというのは誰もおぼえがることでしょう。歩き慣れた道を歩いている時は、何も考えずに道を曲がっています。

E 的な意識の働きというのは、かなり重要です。一流のサッカー選手は、プレイしながらも、ピッチ全体を鳥瞰的
に捉えることができるといいます。敵、味方、ボールの位置をキョロキョロすることなく、把握できているのです。選手
はいちいち「鳥瞰しよう」などと考えているのではなく、自然とそうしているはずで

もっと日常的な例をあげれば、**IX** がそうです。

この鳥瞰するような意識は、人間は誰でもが持っています。だから死にそうな時にも、幽体離脱して自分を見ることが
できる。

《どっちでもいい》

「自分」とは地図の中の現在位置の矢印程度で、**F** 的に誰の脳でも備えている機能の一つに過ぎない。とすると、
「自己の確立」だの「個性の発揮」だのは、やはりそうたいしたものではない。そう考えたほうが自然な気がしてきます。
もともと日本人は、「自己」とか「個性」をさほど大切なものだとは考えていなかったし、今も本当はそんなものを必

要としていないのではないのでしょうか。

最近、ハーバードのビジネススクールの教授が書いた本を読みました。それにこんなエピソードがあります。「人生で自分自身で決めたいことはなにか」と日米の大学生に書かせてみたところ、アメリカ人の学生は配られた紙の裏側まで使ってびっしりと書いた。一方で、日本の大学生は、「住まい」とか「仕事」とか、二行程度書いておしまいだった。

このエピソードをどう考えるべきか。

きっと「自己の確立」や「個性の発揮」を大切だと考える人は、「だから日本の学生はダメなんだ」と言うでしょう。

「自分のことは積極的に自分で決めなくてはいけない、そうやって道を切り拓くべきだ、そのためには大学生にディベートを叩き込め、個性を伸ばせ、そうしないと、これからのグローバル化した社会を生き抜くことはできない」

こうした論調はよく目にします。

でも、日本の大学生にそういう意味での「自己」や「個性」がないのだとすれば、そしてずっと日本人がそういう性質なのだとすれば、それはそういうものを強く求めない文化が日本にあるからだ、と考えたほうがいいのではないのでしょうか。

アメリカの文化は、常に周囲がその人に対して X 求めてきます。強要してくるといってもいい。それが一番端的に表れるのが、

「コーヒーにしますか？ 紅茶にしますか？」

という質問です。いろんなところでそう聞かれるけれども、たいてい私はどっちでもいい。ところが、「どっちでもいいよ、そっちの都合で」と英語で言うのは、意外とメンドウオなのです。

アメリカは、「あなたはこれか？ あれか？」と選択を迫ってくる文化を持っています。それに常に答え続けるとは、どういうことか。つまり答えるうちに、「自己」「個性」をつくっていかざるをえないのです。

「コーヒーにします」

そう答えた時点で、「自分はこういう時にコーヒーと答える人間だ」という項目が「自分」の構成要素として確立されます。別の時に、

「ビールにしますか？ チキンにしますか？」

と聞かれて、

「チキンです」

と答えれば、「基本的に自分はチキン派だ」という項目が立ちます。

日本はどうか。どこかにお邪魔して座ると、黙ってお茶が出てくる。もちろん近頃では「お飲み物は何がよろしいでしょうか？」と聞いてくることもあるでしょうが、聞かれないことが多い。

黙って出されて、黙って飲む。そういう人が大半です。

そこで「私はコーヒー派なので、お茶はいりません」と我を張る人は、たいてい嫌がられます。メンドウくさいやつだと思われることでしょう。

この文化の差は些細ささいに見えるかもしれませんが、かなり **G** 的な違いです。たまたまアメリカを例にしましたが、ヨーロッパでも同じようなものです。

だから日本人は優れているとか、劣っているとか、そういう話をしたいのではありません。そういう文化で私たちは育っている、ということですよ。これは簡単に意識で変えられるようなものではない。

試しに、先ほどの大学生への課題をご自分で考えてみればいいでしょう。「人生で自分自身で決めたいこと」はなにか。

A4判の紙で裏までビッシリ書ける人がどれだけいるでしょうか。結構、「それは世間が決めること」で済ますものが多いのではないのでしょうか。結構、「それは世間が決めること」で済ますものが多いのではないのでしょうか。

繰り返しますが、それが正しいとか間違っているとか、そういう話をしていてはなりません。

しかし、生物学的に見ても「自分」などというものは、地図の中の矢印に過ぎない。そして社会的に見ても、日本にお

いて「自分」を立てることが、そう重要だとも思えない。このように考えると、戦後、私たち日本人はずいぶん無駄なことをしてきたのではないか、と覚えてしまうのです。

「個性を伸ばせ」「自己を確立せよ」といった教育は、若い人に無理を要求してきただけなのではないでしょうか。身の丈に合わないことを強いているのですから、結果が良くなるはずもありません。

()

※領野・・・範囲・領域。

※鳥瞰・・・全体を広く見わたすこと。

(養老孟司 『自分の壁』より)

問1 — 線部ア↘オに相当する漢字を含むものを、次の語群の①↘④のうちから、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。

ア フウチヨウ

- ① カクチヨウの高い文章
- ② 世間のシチヨウを集める
- ③ キチヨウな体験をする
- ④ 時代のチヨウリュウに乗る

イ キソク

- ① 反撃のキカイをうかがう
- ② 交通ホウキに従う
- ③ キタイに応える
- ④ 観測キチの建設

ウ ショウサイ

- ① ショウコウ状態が続く
- ② 快くショウダクする
- ③ 身元フショウの人物
- ④ 中学生タイショウの塾

エ カッコ

- ① 液体がギョウコする
- ② 陶芸家のコテンに行く
- ③ コセキ証明を提出する
- ④ 人員をテンコする

オ メンドウ

- ① 一軍にトウロクされる
- ② 用意シユウトウ
- ③ ビルがトウカイする
- ④ 採用のケントウを行う

問2 — 線部あ↘おを漢字に改めなさい。

問3 — 線部ー「そのような個性」を筆者はどのように定義していますか。文章中の五字以内の言葉を抜き出しなさい。

問4 I に入る言葉を十字以内で答えなさい。

問5 A G に入る語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。(同じものは入りません)

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| a | 意識 | b | 本能 | c | 基本 | d | 客観 | e | 根本 |
| f | 具体 | g | 積極 | | | | | | |

問6 ——線部2「地図の中の矢印」の段落で、——線部3「そもそも『自分』とは一体何なのだろう。」と筆者が論を進めるのは、文章全体においてどういうことを示すためですか。文章中の言葉を使ってまとめなさい。

問7 ——線部4「何らかの形」について、具体的にどのようなことが考えられますか。自分で考えて答えなさい。

問8 ——線部5「そんなこと」の指示内容を答えなさい。

問9 ——線部6「その矢印を消していくとどうなるか」については、——線部7「中略」の箇所具体的に述べてあります。「中略」されている箇所述べられている内容を自分で考えて答えなさい。

問10 ——線部8「臨死体験はなぜ気持ちいいのか」について、その理由を次の条件にそって答えなさい。

条件1 その意味段落の内容をまとめるかたちで答えること。

条件2 「えこひいき」という言葉を必ず使うこと。

条件3 普通の生活をしている状態と比較して答えること。

問 11 II に入る、その意味段落のタイトルとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- a 体内にあるものも外に出ると汚い
- b マイナス感情を流す経済成長
- c 意識は自分をえこひいきする
- d えこひいきは全てをきれいにする

問 12 III VI に入る適語を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- a ところで
- b やはり
- c しかし
- d また
- e では
- f たとえば

問 13 「 VII の東西を問わず」という慣用句になるように VII に入る漢字一字を答えなさい。

問 14 VIII に入る、——線部 9 「なにかをやっているという意識がまったくないということ」という意味になる二字の熟語を答えなさい。

問 15 IX に入る具体例を自分で考えて、十字以内で答えなさい。

問 16 X に入る語句として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- a 「自己」をつくるように
- b 「相手」に合わせないように
- c 「個性」に気づくように
- d 「社会」に合わせるように

問 17 ——線部 10 「この文化の差」について、そこから育まれる性質を含めて、まとめなさい。

問18 文章の最後にある（ ）に入る一文として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- a それだからグローバル化した社会において、多くの国々に先を越されているのではないだろうか。
- b それだから理想ばかりが先行してしまい、本当の意味での自分を見失っているのではないだろうか。
- c それよりは自分をえこひいきすることの危険性を知るほうが、ためになったのではないだろうか。
- d それよりは世間と折り合うことの大切さを教えたほうが、はるかにましではないだろうか。

問題は以上で終了です。

受験番号		氏名		採点	
------	--	----	--	----	--

問 1	ア		イ		ウ		エ		オ	
問 2	あ	れ	い		う		え		お	
問 3										
問 4										
問 5	A		B		C		D			
	E		F		G					
問 6										
問 7										
問 8										
問 9										
問 10										
問 11										
問 12	Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ			
問 13										
問 14										
問 15										
問 16										
問 17										
問 18										

受験番号		氏名		採点	
------	--	----	--	----	--

問1	ア	④	イ	②	ウ	③	エ	①	オ	③
問2	あ	憧 れ	い	肝 心	う	破 損	え	理 屈	お	普 及
問3	人	と	違	う						
問4	人	と	同	じ	と	こ	ろ			
問5	A	g	B	f	C	b	D	a		
	E	d	F	c	G	e				
問6	<p>「自分」とは地図の中の現在位置の矢印程度で、誰の脳でも備えている機能の一つに過ぎず、 「自己の確立」や「個性の発揮」などということは、そうたいしたことではないということを示すため。</p>									
問7	<p>〔例〕目標のある方向が分からなくなった時は、人に尋ねる。</p>									
問8	<p>脳の中には、「自己の領域」を決めている部位があるということ</p>									
問9	<p>自分と地図が一体化する。</p>									
問10	<p>普通の生活をしている状態では、自分を脅かすようなものよりも、自分をえこひいきして大切にするが、 臨死体験は、自分が世界と一体化することによって、周りに敵や異物が一切ない、至福の状態になるから。</p>									
問11	c									
問12	Ⅲ	c	Ⅳ	f	V	e	Ⅵ	b		
	問13	洋								
問14	無	心								
問15	<p>自 転 車 の 運 転</p> <p style="text-align: right;">〔例〕</p>									
問16	a									
問17	<p>日本では、相手に対して選択を求めることはあまりなく、「自己」や「個性」を強く求めない文化があり、 アメリカでは、選択を迫ってくる文化があることから、 それに答えるうちに、「自己」「個性」をつくっていかざるをえない。</p>									
問18	d									